

2022年1月16日（日）主日朝礼拝説教

『主のめぐみの年』井上隆晶牧師

I テモテ 4 章 13～16 節、ルカ福音書 4 章 16～30 節

### ①【昔の会堂礼拝の様子】

「いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。」「いつものように」と聖書は語ります。イエス様はいつもナザレの会堂に通って礼拝を守っておられたことがわかります。聖書朗読は、信徒なら誰でもできました。ラビ（教師）に指名されたら立って、聖書を開いて朗読します。旧約聖書は今のように一冊の書物にはなっておらず、それぞれの書は巻物になっていました。ここでも「預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまりました」とあります。

●昔、神戸のシナゴークに行ったことがあります。壁に棚があって、そこに赤いベルベットのカーテンが吊ってあり、その上にヘブライ語の文字が金糸で刺繍されていました。そのカーテンを開くと中から巻物の形の入れ物に入った聖書が出てきます。それを朗読台の上に広げて頭にかぶり物をして朗読するのです。

ユダヤ教ではどうか知りませんが、正教会では福音書を祭壇から持って行進する時、司祭は「英知、慎みて立て」といいます。その時、信徒は皆起立しました。福音書が朗読される時も立ったまま聞く所が多いと思います。それは旧約時代からの習慣だったようです。「書記官エズラは、そのために用意された木の壇に上に立った。…彼が書を開くと民は皆、立ち上がった。エズラが大いなる神、主をたたえたと民は皆、両手を挙げてアーメン、アーメンと唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて主を礼拝した。」（ネヘミヤ 8：）ネヘミヤ記には 7 月 1 日に、夜明けから正午までモーセの律法の書をエズラが読み上げ、民は皆、耳を傾けたと書かれています。立つというのが本来の礼拝の姿勢です。礼拝堂に椅子が置かれるようになったのはだいぶ後の時代です。立つのは緊張と尊敬の姿勢です。私たちも礼拝ではきちんと立たなければなりません。

### ②【イエス様によって主の恵みの年が始まった】

イエス様はこの日、イザヤ書 61 章を朗読されました。その日の朗読箇所なのだと思いますが、イエスが選ばれたのかもしれませんが、イエス様は朗読しながらある個所に目が留まりました。それは「主の霊が私の上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」という個所でした。この個所はメシアによって福音が告げられ、人々は解放され、恵みの年が始まるという預言です。「主が私に油を注がれた」とありますが、メシアとは「油注がれた者」という意味です。昔は王、祭司、預言者には油を注いで任職式をし

したが、メシアはこの三つの職を兼ね合わせています。聖霊が自分の上にとどまっていることが、油を注がれたことであり、メシアとして立てられたことなのです。イエス様が洗礼を受けた時、聖霊がイエス様の上に降ったことを思い出して下さい。それが油注ぎなのです。「主の恵みの年」とは「ヨベルの年」(レビ25章)のことです。ヨベルとは雄羊という意味で、雄羊の角笛を吹いて始まる解放の年を意味しています。この年は50年ごとにやってきて、その年には出稼ぎの人も自分の家に帰り、売られた土地も元の所有者に返され、奴隷も解放されて自由になり、借金も帳消しになりました。イエス様によってユダヤ人だけでなく、全人類の「ヨベルの年」が始まったということです。しかも50年ごとではなく毎年になったのです。私たちの罪という借金は帳消しになったのであり、死の呪いから解放され、神の国へ帰れるようになったのです。この2022年も「主の恵みの年」だと思ってください。

### ③【み言葉は今日、実現する】

朗読が終わると説教がなされます。イエス様は巻物を巻き、係りの者に返して席に着きました。会衆は、イエス様は何をここから語るのだろうと注目して見つめていました。説教も靈感を受けたら誰でも自由にして良かったのです。するとイエス様は「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められました。つまりイエス様は、ここに書かれているメシアとは自分であるといわれたのです。

●神学校時代に、「メシアの自覚」というテーマでを学んだことがあります。イエス様はいつごろから、自分がメシアであるということに気がついたのかということです。今日のイザヤ書61章の個所や、詩編40編7~8節にある「あなたはいけにえも、穀物の供え物も望まず、焼き尽くす供え物も、罪の代償の供え物も求めず、ただ、わたしの耳を開いてくださいました。そこでわたしは申します。ご覧ください、わたしは来ております。わたしのことは、巻物に記されております。」という個所で悟ったのではないかと思われます。「耳を開いてくださいました」とあるように、聖霊がイエス様の耳を開き、「わたしのことは、巻物に記されております」とあるように、これは自分の事なのだと思つたです。

イエス様がこの個所に目が留まったのも「これは私のことだ。私に言われていることだ」と聞いたという事です。そのような聖書の読み方をしなければなりません。聖人と言われる人たちは皆、神から「~をせよ」という具体的な言葉をもらっています。だから自分の活動に確信がありました。み言葉を自分にいわれた言葉として聞く力を持っていたからです。イエス様は「この聖書の言葉は、今日…実現した」といわれました。確かにこのメシア預言はイエス様によって実現したのですが、すべての信徒にとっても同じなのです。今日、み言葉を聞いたなら、それが過去に書かれた言葉であったとしても、「今日それはなる」というように読まなければなりません。なぜなら、神の言葉は生きていて死ぬことがなく、どの時代でも有効だからです。み言葉は昔の人にも語りかけ、今の人にも同じように

語りかけます。私たちも聖霊を受けたのです。皆さんは油を注がれたのです。それは皆さんも小さなメシアとされ、大いなるメシアの業を継承する者となったということなのです。大祭司ではないけれども、家庭の小祭司です。大中小でいうなら私は教会の中祭司です。ルターが言った「万人祭司」とはそういう意味です。偉いという事ではなく役割です。皆さんも職場で福音を伝え、主の恵みを伝えてください。

#### ④【み言葉を聞く力と活動力のバランス】

会衆はイエス様をほめ、その言葉に驚き「この人はヨセフの子ではないか」と言います。それに対してイエス様は「あなたがたは…カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれというに違いない」と言われます。この意味は「イエスよ、あんたは知り合いの子だ。親しいんだから地方で奇跡を行ったように、郷里でも奇跡を起こしてくれよ」と、まるでイエス様を自分たちに便宜をはかってくれる者として扱ったということなのです。イエス様は「預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ」と言われ、旧約聖書から引用して預言者エリヤもエリシャも故郷では奇跡を行わなかったと言うと、民衆は憤慨して立ち上がり、イエス様を町の外の崖まで連れて行って突き落として殺そうとしますが、イエス様は人々の間を通り抜けて立ち去られました。最初は褒めていたのに、自分たちのいう事を聞いてくれないと分かった途端に、殺そうとするなんて驚きです。でもイエス様の人生を通して人はいつも同じでした。神に従うのではなく、神を自分に従わせようとしています。この悪い心は礼拝堂の中で起こりました。神の言葉を素直に聞くことができない者から、イエス様は立ち去ってしまわれるのです。

●柏木哲夫先生がある本の中にこんなことを書いていました。自宅の庭に植えてあるペチュニアの花に蜂が蜜を求めて飛び回っていました。ふと蜂の姿と自分の姿が重なったというのです。「実に忙しそうにあっちへ行ったり、こっちへ行ったりして動き回っている蜂の姿が自分と二重写しになったのです。ペチュニアの花はというと、蜂とはまったく対照的に、少しも動かずそこに凜として咲いています。…その場から動かないでひたすら受け身の状態で、太陽の光をいっぱい浴びてしっかり咲いている。そういう姿を見た時、じっと動かずにいるペチュニアの力のようなものを強く感じました。そして、自分は受け身の時間をどれほどもっているだろうかと深く反省しました。」

受け身の時間というのは、神に聞く時間のことです。神に養われる時間といってもいいでしょう。神様は動物と植物の両方を造られたという事は、「動と静の両方のバランス」を持つことが人間には必要だという事なのではないのでしょうか。輪ゴムは後ろに引けば引くほど、前へ遠くまで飛びます。神の言葉をしっかり聞く人ほど、活動力もあるのではないかと思うのです。イエス様の神の言葉を聞く力に、私たちも真似たいと思います。